



炬火を掲げていざ謳う

No.17



我らの泉鳥取

2022年9月26日（月）

編集・発行 泉鳥取高校 教頭（妻木）

大阪府阪南市緑ヶ丘1-1-10

<https://www.osaka-c.ed.jp/custom91.html>

連綿と続く 卒業生と先生（2）

祭り指導と「はせドン」

生徒とともに指導を受けた先生



泉大津市田中町御披露目 (sakura.ne.jp)

昭和60年当時、高校では祭りによる欠席者に対して「祭り指導」を行っていました。

当時祭礼は、岸和田だんぢり祭（旧城下）が9月14・15日、城下以外の岸和田市内や泉南市以北の祭礼が10月9・10日などと日程が決まっており、祭礼に参加すると、1日は学校を休まなければなりません。飲酒や喫煙事例も多く、「好ましくない行事」とみていたのです。どの府立高校でも祭りの欠席指導を行っていたのです。

ただ、生徒たちは「学校は3年、祭りは一生」と、祭り指導を覚悟して、事前に担任に休む旨を伝え、あとで「祭り指導」を受ける生徒が多くいました。泉鳥取高校での指導内容は、漢字のプリント課題と、校内での床磨きでした。

その中で、教員で「祭り指導」を受けていた先生がいました。体育の長谷川晃先生です。昭和53年4月本校教諭として着任し、平成元年4月に転勤されるまで12年連続担任、男子バレーボール部顧問をつとめられました。だんぢりが大好きで、大学の卒業論文もだんぢりをテーマにしたものでした。教員になってからも、10月10日前後は休んでだんぢり祭りに参加しました。

「生徒に『祭りで休むな』というからには、自分もきちんと指導を受ける」と、生徒とともに漢字の課題を提出し、床を磨いていました。

法被を着てだんじりから離れてちゃらちゃらししている生徒に「法被着てんねやったら、曳かんか！！」とどなったりしていました。祭りが本当に好きなうえ、そのお茶目さもあって、体育の厳しい先生でしたが、生徒に人気がありました。「あの先生、おれらの気持ちわかってくれらあ」

転勤した後も、泉大津市田中町だんじりの後ろ梶子としてがんばっていた平成元（1989）年10月、だんじり祭り中に心筋梗塞で急死しました。享年33歳。通夜には1000人を超える生徒、卒業生が集まりました。また告別式の日、学校の視聴覚教室で先生を慕う生徒たちが「見送り会」をしました。

その後、公立の学校が土日休みとなり、祭りの日程も変わったため、学校を休まなくても祭りに参加できるようになり、さらに祭りが地域の文化行事として見直されていった結果、「祭り指導」は姿を消しました。



長谷川晃先生

9期生卒業アルバムより